メディアプロデュースプログラムからメディアコミュニケーションプログラムへ
—2011～2020 年度の教育活動—

Shifting the Curriculum from a Media Producing Program to a Media Communication Program

—Educational Activities from 2011 to 2020－

ネットワーク情報学部　藤原正仁，山下清美，杉田このみ

文学部　福冨忠和

School of Network and Information　Masahito FUJIHARA, Kiyomi YAMASHITA, Konomi SUGITA
School of Letters　Tadakazu FUKUTOMI

Keywords: media production, filmmaking, web design, leaflet design, communication

Abstract

The School of Network and Information at Senshu University introduced eight program systems and established a media producing program in 2009. After 10 years, in 2019, this program was merged with a part of the social information program and reorganized into the media communication program. This paper shows the educational activities of the media producing program and the media communication program from 2011 to 2020. A sophomore seminar for the media producing and media communication programs provides students with the opportunity to understand media production as well as the relationship between informatics and the community.

はじめに

専修大学ネットワーク情報学部は、1964 年度に経営学部経営学科に創設された電子処理コース（1971 年度から情報管理コースに改名）を起源とし、1972 年度に経営学部に創設された情報管理学科を前身として、2001 年 4 月に創設された[1]。

ネットワーク情報学部は、2009 年度にカリキュラムを改定して「プログラム制」を導入し、コンテンツデザイン、ネットワークシステム、ユビキタスシステム、経営情報分析、IT ビジネス、社会情報、情報数理に並ぶ 8 つのプログラムの一つとして、メディアプロデュースを設置した[2]。

その後、ネットワーク情報学部は、2019 年度にカリキュラムを改定して、データと数理に基づいて問題分析・解決を行う S コースと、ユーザとの対話に基づいて問題発見・解決を行う D コースという 2 つの「コース制」を導入し、「プログラム制」を改編した[3]。S コースには、データサイエンス、ネットワークシステム、D コースには、コンテンツデザイン、メディアコミュニケーション、フィジカルコンピューティング、IT ビジネスのプログラムが設置された[4]。2019 年 4 月、メディアプロデュースプログラムは、社会情報プログラム(1)の一部と合併し、メディアコミュニケーションプログラムに改組された。

本稿では、2011 年度から 2020 年度の 10 年間を振り返り、メディアプロデュースプログラムとメディアコミュニケーションプログラムの教育活動について報告する。とくに、2 年次必修科目の「応用演習」（後期・4 単位）は、プログラムの基礎となる科目である。そこで、本稿では、これらのプログラムの教育活動の中でも、「応用演習」の取り組みに焦点を当てることとする。

メディアプロデュースプログラム

2.1. 教育目標と概要

メディアプロデュースプログラムは、「デジタル・ネットワーク時代のメディアを、有効に利用した企画をプロデ

ュースできる人材」の育成を目的とし、「プロジェクト管理、知的所有権、会計などのマネジメント知識」の修得を目指した[2]。

メディアプロデュースプログラムの学習・教育目標は、以下の四点であった[2]。第一に、メディアとネットワーク環境、表現、ビジネス、社会と政治の位相でコンテンツを理解する、第二に、コンテンツを送り手として具現化するためのプロセス、条件、人材（スキル）、技術について理解する、第三に、メディア、ネットワークとコンテンツの社会的、文化的な意味を理解し、未来に向けて価値あるコンテンツを創造するための基礎知識とスキルを身につける、第四に、コンテンツを製作するために必要とされる企画、コミュニケーション能力、及びプロセスを計画し実行する能力を身につけることであった[2]。

2.2. 応用演習（メディアプロデュース）

「応用演習（メディアプロデュース）」（以下、MP 応用演習）は、2010 年度から 2019 年度に開講された。履修者は、各年度 42 名程度であった。

MP 応用演習の目標は、ニーズを踏まえてコンテンツを企画、制作し、専門的知識や技術、コミュニケーション能力を習得することであった。

そこで、MP 応用演習では、以下の夏期課題を課し、学生の自学自習やグループワークを促すとともに、コンテンツの企画や制作技能などを把握した。

1) 多摩区および専修大学の PR 映像の企画書と絵コンテの作成
2) NPO または市民活動団体（以下、市民活動団体）の調査レポートの作成
3) 3 つ折りリーフレット、Web サイト、映像の自習と制作

MP 応用演習の前半では、個人課題として、多摩区または専修大学の PR 映像（30 秒の CM）を制作した。後半では、グループ課題として、公益財団法人かわさき市民活動センター（以下、かわさき市民活動センター）との連携により、かわさき市民活動センターに登録等の市民活動団体の広報に資する紙媒体（3 つ折りリーフレットなど）、Web サイト、映像（3 分程度）を制作した。

MP 応用演習では、学生が取り組んだ課題を教員とティーチング・アシスタント（以下、TA）が確認し、修正事項について指導した。また、学生の相互評価を行い、制作物の質的向上を目指した。

授業終了時には、リフレクションシートを使用して、授業での取り組み、学びや気づき、次回の目標設定を記入してもらった。加えて、最終授業時には、授業の改善を目的として、授業アンケートを実施した。

2.3. PR映像制作

MP 応用演習の前半では、夏期課題として提出された多摩区または専修大学の PR 映像の企画書と絵コンテを、教員と TA が確認して、修正事項について指導した。学生は、対象の課題やニーズを踏まえ、提案した企画や表現内容を検討して修正を重ね、PR 映像の質的向上を図った。並行して、カメラ、三脚、マイク、照明などの撮影機材および映像編集ソフトウェアに関する実習を行い、実現可能な表現や技術を検討した。加えて、映像制作における著作権や肖像権、撮影許可における関連法令や制度、手続きなどを説明した。

撮影時には、カメラ・ワークやイマジナリー・ライン、ホワイトバランスなどの基本的事項を説明した。学生は、基本的には各自が追求する表現に合わせて自ら撮影したが、場合によっては、学生同士で協力したり、必要なスタッフやキャスト、小道具などを自ら用意して撮影を行った。

編集時には、教員と TA は、全体の構成を再検討しながら、ノンリニア編集でつなげられた粗編を確認し、修正事項について指導した。学生は、企画書と絵コンテと照らし合わせて粗編を確認し、構成やトランジション、音声、BGM、テロップ、カラーバランスなどの修正を重ね、完成を目指した。

11 月中旬に、学内で、「個人制作課題発表会」を開催し、学生が自らの作品を説明後、上映した。教員による講評、学生による相互評価を踏まえて、最終的に修正され、完成した PR 映像が提出された。

2.4. NPO・市民活動団体の広報メディア制作

MP 応用演習の後半では、かわさき市民活動センターと連携し、かわさき市民活動センターに登録等の市民活動団体の広報に資する紙媒体（3 つ折りリーフレットなど）、Web サイト、映像を制作した。対象の市民活動団体は、毎年 10 団体程度であり、まちづくり、環境保全、保健・医療・福祉、学術・文化・芸術、子どもの健全育成、障がい者支援、生涯学習、動物愛護など、多岐にわたる活動を担っていた。学生は、まず、市民活動団体の組織や活動内容などを理解し、市民活動団体が抱えている課題やニーズを把握する必要があった。そこで、1 グループあたり 4〜5 名となるように学生のグループを編成した。学生のグループは、夏期休暇中に、市民活動団体の調査を行い、レポートにまとめて提出した。

授業時には、学生は、市民活動団体の調査を踏まえて、打ち合わせ、取材、撮影などを重ね、多メディア展開の広報企画を立案し、必要な情報を収集して、コンテンツを実装した。学生は、市民活動団体と打ち合わせ後、速やかに議事録を作成し、市民活動団体の担当者、グループの学生、教員、かわさき市民活動センターの担当者にメールで送付し、情報共有を図った。教員と TA は、毎回、各グループの進捗状況を確認し、市民活動団体の課題やニーズと、立案された企画やコンテンツとを照らし合わせて、修正事項について指導した。学生は、市民活動団体の担当者からの

要望や修正事項も踏まえて修正を重ね、完成を目指した。

この間、かわさき市民活動センターの担当者には、進捗状況を確認いただき、適宜、助言や支援を受けた。

1 月中旬には、3 つ折りリーフレット、Web サイト、映像が完成し、市民活動団体に納品された。

2.5. 学内外での発表会

1 月下旬に、学内で、「MP 応用演習発表会」が開催された。学生は、MP 応用演習で制作した PR 映像、紙媒体、Web サイト、映像を紹介したポスターと最終制作物をもとに発表を行い、相互評価を実施した。教員は、すべての最終制作物を確認して評価を行った。

また、MP 応用演習の前半に制作した多摩区または専修大学の PR 映像は、川崎市多摩区役所、専修大学理事長室広報課、入学センター入学課、教員が審査した。そして、優秀作品を制作した学生を表彰した。川崎市多摩区役所より川崎市多摩区長賞、最優秀賞、優秀賞が、専修大学理事長室広報課より専修大学広報課最優秀賞、優秀賞、特別奨励賞が、専修大学入学センター入学課より専修大学入学センター優秀賞、特別奨励賞が、教員より特別奨励賞が授与された（資料）。

2 月上旬には、教員、学生、市民活動団体、かわさき市民活動センターの担当者が一堂に会し、かわさき市民活動センターで、「かわさき NPO 映像交流会」が開催された。学生は、最終制作物の発表を行い、講評を受けた。また、参加者で意見交換がなされ、交流が深められた。

2.6. 学外コンテストへの応募と受賞

MP 応用演習で制作した映像作品は、学外のコンテストに応募し、外部の専門家に審査された。その結果、第 3 回かながわ NPO 映像祭優秀賞、第 4 回かながわ NPO 映像祭優秀賞、第 5 回かながわ NPO 映像祭優秀賞、第 6 回かながわ NPO 映像祭優秀賞、第 7 回かながわ NPO 映像祭グランプリ、第 1 回かんとう NPO 映像祭グランプリ、わがまち CM コンテスト 2016 かながわ大会準グランプリ、かながわ市民映像祭 2017 NPO のプロモーション映像部門優秀賞、かながわ市民映像祭 2017 わがまち CM 部門グランプリ、「地域発デジタルコンテンツ」総務大臣奨励賞などを受賞した（資料）。

2.7. 授業アンケート

MP 応用演習（2018 年度）の最終授業時に実施したアンケート（図 1）によると、「コンテンツの制作能力を身につけた」（「そう思う」と「まあそう思う」の合計 97%）、「コミュニケーション能力を身につけた」（同 93%）、「クリエイティブ系ソフトウェアを活用できた」（同 86%）、「地域の課題について理解が深まった」（同 82%）と、肯定的な回答をしている学生が 8 割以上示された。

一方で、「知的財産権について理解できた」（同 59%）、「プロジェクトマネジメントができた」（同 62%）、「多メディア展開を企画立案できた」（同 65%）などについては、学生の肯定的な回答は 6 割程度に留まった。そのため、コンテンツ制作の過程で必要となる知的財産権やプロジェクトマネジメントなどについての理解を促すような授業設計が課題である。

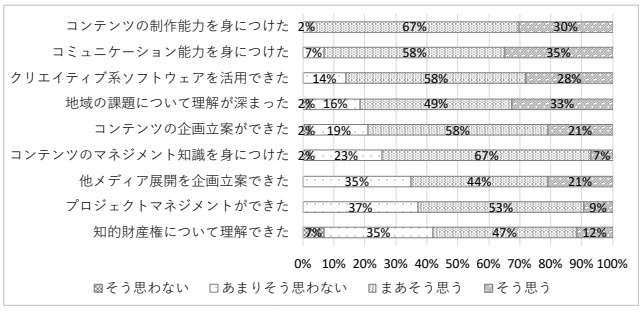

図 1 MP 応用演習で身につけた能力（2018 年度）

メディアコミュニケーションプログラム

3.1. 2019年度のカリキュラム改定

ネットワーク情報学部は、2019 年度にカリキュラムを改定して、「コース制」を導入し、「プログラム制」を改編した。メディアプロデュースプログラムは、社会情報プログラムの一部と合併し、メディアコミュニケーションプログラムに改組された。

メディアプロデュースプログラムは、「デジタル・ネットワーク時代のメディアを、有効に利用した企画をプロデュースできる人材」の育成を、社会情報プログラムは、「対話や交流のための場作りや、情報技術を生かしたネットワーク作りを通して、社会や組織を活発にし、問題解決に貢献できる人材」の育成を目指してきた[2]。

これらのプログラムが対象とするメディアとコミュニケーションの領域は、情報学における「情報を扱う人間社会に関する理解」に位置づけられる[5]。メディアコミュニケーションプログラムは、メディアプロデュースプログラムと社会情報プログラムの成果の継承と発展を目指している。

3.2. 教育目標と概要

メディアコミュニケーションプログラムは、「高度情報化社会において、確かなメディアリテラシーと豊かなコミュニケーション能力を兼ね備え、メディアとコミュニケーションの理論と技能を創造的に活用し、人間、組織、地域社会（コミュニティ）の諸課題を革新的に解決できる人材」の育成を目的としている[4]。また、「コンテンツの発信者や受信者とのコミュニケーションを通して、両者をつなぐメディアの新たな価値をプロデュースできる力」や「地域社会との連携活動を通じて、メディアコンテンツの企画開発、プロジェクト管理、知的財産権の処理、コミュニケー

ションデザインなど、メディアとコミュニケーションを有効活用する考え方」の修得を目指している[4]。

メディアコミュニケーションプログラムの学修・教育目標は、以下の四点である[4]。

第一に、ネットワーク環境、表現、ビジネス、人間、社会の観点から、メディアとコミュニケーションを理解する、第二に、メディアの特性と送り手・受け手の関係性を理解し、適切かつ創造的に情報を扱う、第三に、人間の認知・学習・コミュニケーションの仕組みを理解し、適切な情報の伝達・共有・意思決定を行う、第四に、人間、組織、地域社会（コミュニティ）における諸課題を、コミュニケーションを深めることにより発見、探究し、メディアを創造的に活用して、革新的に解決できる知識と技能を身につけることである[4]。

3.3. 映像演習基礎

メディアコミュニケーションプログラムへの改組にともない、2020 年度にメディアコミュニケーションプログラムの必修科目として「映像演習基礎」が開設された。本科目では、MP 応用演習の前半に位置づけられていた PR 映像制作の教育が行われている。

2020 年度の映像演習基礎は、新型コロナウィルス感染症予防のため、オンラインで開講された。通常の撮影は困難であったため、テーマは、多摩区または専修大学の PR 映像に加えて、新型コロナウィルス感染症予防啓発映像が選択肢として追加された。撮影や編集などが制約された学習環境ではあったが、創意工夫を凝らした作品が多く制作された。

3.4. 応用演習（メディアコミュニケーション）

「応用演習（メディアコミュニケーション）」（以下、MC 応用演習）は、2020 年度に開講された。2020 年度の履修者は、42 名であった。

MC 応用演習の目標は、調査や取材を通して、クライアントの課題やニーズを把握し、コンテンツを企画、制作し、専門的知識や技術、コミュニケーション能力を習得することである。

そこで、MC 応用演習では、以下の夏期課題を課し、学生の自学自習やグループワークを促すとともに、コンテンツの企画や制作技能などを把握している。

1） 市民活動団体の調査レポートの作成
2） 3 つ折りリーフレット、Web サイト、映像の自習と制作

MC 応用演習では、MP 応用演習の後半に位置づけられていた広報メディア制作の教育が行われている。グループ課題として、かわさき市民活動センターとの連携により、かわさき市民活動センターに登録等の市民活動団体の広報に資する 3 つ折りリーフレット、Web サイト、映像（3 分程度）を制作している。

これらのコンテンツの企画立案から制作、修正、納品に至る過程において、教員、学生、市民活動団体、かわさき市民活動センターとのコミュニケーションが重要となる。そのため、ネットワーク情報学部で提供されているビジネスチャットツールを使用し、グループを作成して、各グループの学生および教員との円滑な情報共有を図っている。また、学生は、市民活動団体との打ち合わせの議事録を作成して関係者との情報共有と進捗管理を行っている。議事録は、グループでのコンテンツ実装における指導にも役立てられている。なお、2020 年度の MC 応用演習では、学生と市民活動団体との打ち合わせは、平均で約 8 回行われた。

2020 年度は、新型コロナウィルス感染症の予防対策により、対面授業とオンライン授業を組み合わせて実施された。そのため、学習管理ツールを活用して、授業資料や課題、制作物などの学修リソースを一元管理し、情報共有を図った。また、学生の相互評価を毎回オンラインで実施し、多様な視点の獲得を目指した。

MP 応用演習では、「グループ活動の中での能力差やフリーライドをどう考えるか」などの課題が挙げられたが[6]、MC 応用演習では、チャットや相互評価を通じて、グループ活動における進捗やコミュニケーションを可視化することにより、上記の課題は回避された。しかし、MC 応用演習では、教員、学生、市民活動団体、かわさき市民活動センターの担当者とのコミュニケーションを図り、広報メディアを制作していくことが重要となるため、教員と学生、学生間の視点だけでなく、市民活動団体の担当者との協同を促すような授業設計が求められるだろう。

まとめ

本稿では、2011 年度から 2020 年度の 10 年間を振り返り、メディアプロデュースプログラムとメディアコミュニケーションプログラムの教育活動について報告した。

MP 応用演習および MC 応用演習では、学生は、コンテンツの企画、制作、修正、そして完成に至る過程で専門的知識や技術を身につけるだけでなく、教員、市民活動団体、かわさき市民活動センターの担当者との関わりを通じて、地域社会の課題についても理解を深めている。MP 応用演習および MC 応用演習は、学生にとって、情報学と地域社会との関連について視野を広げる学修機会となっている。また、教員、学生、市民活動団体、かわさき市民活動センターの協同によって制作された広報メディアは、市民活動団体の方々に活用されており、活動の推進への寄与が期待される。

今後の課題としては、MC 応用演習における学修成果と制作された広報メディアの活用について検討を行い、より一層の教育の質的向上を図っていくことである。

注

(1) 社会情報プログラムは、2009 年度に 8 プログラムの 1 つとして、主に人文社会科学の立場から社会や組織の問題解決を目指すプログラムとして設置された。2019 年度の 6 プログラム体制への移行に伴い、社会情報プログラムの要素は、データサイエンス、コンテンツデザイン、メディアコミュニケーションの 3 つのプログラムに発展的に引き継がれることとなった。メディアコミュニケーションプログラムには、社会情報プログラムの中の、主にコミュニケーションに関する理解や実践の部分が生かされている。

謝辞

公益財団法人かわさき市民活動センター、川崎市多摩区役所まちづくり推進部企画課の皆様に、心より感謝申し上げる。

参考文献

[1] 佐藤創　2011　「ネットワーク情報学部創設 10 年までの歩み」『専修ネットワーク＆インフォメーション』19, 3-8.

[2] 専修大学ネットワーク情報学部　2009　「ネットワーク情報学部 学習ガイドブック 2009」

[3] 専修大学ネットワーク情報学部ネットワーク情報学科 https://www.senshu-u.ac.jp/education/faculty/network/network/ （2021 年 1 月 10 日最終確認）

[4] 専修大学ネットワーク情報学部　2019　「2019 ネットワーク情報学部学修ガイドブック」

[5] 日本学術会議情報学委員会情報科学技術教育分科会 2016　「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 情報学分野」

[6] 上平崇仁・栗芝正臣・杉田このみ・福冨忠和・藤原正仁・星野好晃・松永賢次　2014　「情報学を学ぶ学生たちを活用した地域貢献活動の事例」『情報処理学会論文誌』55(8), 1725-1733.

資料：応用演習（メディアプロデュース）受賞作品

2011 年度
川崎市多摩区長賞
　「なんどでも…」
　「忘れられないまち、かわさき」
専修大学広報課特別奨励賞
　「それぞれの社会知性」
専修大学入学センター賞
　「それぞれの社会知性」
専修大学教員特別奨励賞
　「犬も行きたくなる 川崎市多摩区」
第 3 回かながわ NPO 映像祭優秀賞
　「食と農で地域の安心・安全をつなぐ uzumaki 活動」

2012 年度
川崎市多摩区長最優秀賞
　「水と緑と学びのまち」
川崎市多摩区長優秀賞
　「とっておきの街、多摩区」
　「思い出が生きる街」
専修大学広報課特別奨励賞
　「もしも私がここにいなかったら」
専修大学入学センター特別奨励賞
　「未来へ羽ばたこう」
専修大学教員特別奨励賞
　「ばら苑での約束（前編・後編）」
　「ばいぞーくんのうた」
　「私だけが知っている素敵な場所」
第 4 回かながわ NPO 映像祭優秀賞
　「相互救護をめざして」

2013 年度
川崎市多摩区長賞
　「あしたも、あさっても」
専修大学広報課最優秀賞
　「あなたの学びのもっと先へ、」
専修大学広報課特別奨励賞
　「専修セブン（法ホワイトと経営グリーン編／人間科学ピンクと商学ブルー編／文学イエローとネットワーク情報学部ブラック編）」
専修大学入学センター特別奨励賞
　「専修セブン（法ホワイトと経営グリーン編／人間科学ピンクと商学ブルー編／文学イエローとネットワーク情報学部ブラック編）」
専修大学教員特別奨励賞
　「大切な人と大好きなまち」
　「多摩区ってどんなところ？」
　「相馬さんの専修大学訪問記」
第 5 回かながわ NPO 映像祭優秀賞
　「だいし水辺の楽校 PR 映像」

2014 年度
川崎市多摩区長最優秀賞
　「音と多摩区」
川崎市多摩区長優秀賞
　「たまさんぽ」
専修大学広報課最優秀賞
　「おさそい。」
専修大学入学センター特別奨励賞
　「専修大学で学ぼう」
専修大学教員特別奨励賞
　「良いなとおもう場所がある」

「その一瞬を大切にしよう」
「あなたを咲かせる場所」
第 6 回かながわ NPO 映像祭優秀賞
「あなたの老後に潤いを」
「いつでも、しゃべり場」
第 6 回かながわ NPO 映像祭入選
「地域の学び舎　むじなが寺子屋」
「市民をつなぐぐらすかわさき」
「WE ショップ・たかつ見聞録」
「あなたの老後に潤いを」
「出会いからはじまる多文化国際理解教育」
「おしえて！くぅもん」
「いつでも、しゃべり場」

2015 年度
川崎市多摩区長最優秀賞
「わたしの好きなまち」
川崎市多摩区長優秀賞
「あなたの休日に緑を」
専修大学広報課優秀賞
「誰かが支えてくれる。だから学べる。」
専修大学入学センター優秀賞
「楽しみ方はあなた次第」
専修大学入学センター特別奨励賞
「誰かが支えてくれる。だから学べる。」
「百円あったら、専大いこう。」
「専修大学でみつけよう」
「ここだから頑張れる」
専修大学教員特別奨励賞
「仲直り」
「『僕も』好きですかわさき愛のまち」
「はなたま-生田緑地と多摩川編-」
第 7 回かながわ NPO 映像祭グランプリ
「点字で人と人をつなぐ」
第 7 回かながわ NPO 映像祭入選
「点字で人と人をつなぐ」
「つながり：かわさき NPO 法人連絡会」
「チーム・パーキンソン：人よりちょっと、おちゃめです」
「つながろう！！こどもたちのために」

2016 年度
川崎市多摩区長最優秀賞
「マンガの王様に愛された街」
川崎市多摩区長優秀賞
「あなたにとって多摩区とは」
専修大学広報課優秀賞
「ここで、学ぶ。」
専修大学入学センター優秀賞
「センディーズロール」
専修大学入学センター特別奨励賞
「どんなことにも、夢中になれる」
専修大学教員特別奨励賞
「多摩区の鼓動」
「今、走り出したくなる町」
「いつもの日が、ちょっぴりすてきに。」
第 1 回かんとう NPO 映像祭グランプリ
「ダンスの力を信じて”障がい”という垣根をなくしたい」
第 1 回かんとう NPO 映像祭入選
「ダンスの力を信じて”障がい”という垣根をなくしたい」
「笑顔でつながる地域の和」
「人と野良猫のよりよい地域づくりを目指して」
「みんな たまプレに集まれ！」
「子育てが好きな男性ってどう思う？」
わがまち CM コンテスト 2016 一般部門奨励賞
「今、走り出したくなる町」
「いってきます、多摩区。」
「多摩区の鼓動」
わがまち CM コンテスト 2016 かながわ大会準グランプリ
「今、走り出したくなる町」
わがまち CM コンテスト 2016 かながわ大会優秀賞
「いつもの日が、ちょっぴりすてきに。」
「多摩区の 3 つの魅力とは」

2017 年度
川崎市多摩区長最優秀賞
「私を見守ってくれる街」
川崎市多摩区長優秀賞
「僕はこの街で暮らしていく」
専修大学広報課最優秀賞
「いろんな出会いが待っている」
専修大学広報課優秀賞
「夢を叶える場所」
専修大学入学センター優秀賞
「私たちの大学」
専修大学教員特別奨励賞
「多摩区：伝えたい風景」
「川崎と 3 つの魅力」
「思い出せば、すぐそばに」
かながわ市民映像祭 2017 NPO のプロモーション映像部門優秀賞
「NPO 法人シェアドッグスクール紹介ムービー」
かながわ市民映像祭 2017 NPO のプロモーション映像部門入選
「NPO 法人シェアドッグスクール紹介ムービー」
「武蔵小杉ワーキングマザー交流会」

「りんぴっぴプロモーションビデオ」
「菜の花ダイニングの一日」
「にこにこあおむし人形劇団」
かながわ市民映像祭 2017 わがまち CM 部門　グランプリ
「わたしが生きる町」
かながわ市民映像祭 2017 わがまち CM 部門　優秀賞
「僕はこの街で暮らしていく」
かながわ市民映像祭 2017 わがまち CM 部門　入賞
「多摩区の一日」
「多摩区～伝えたい風景～」
「僕はこの街で暮らしていく」
「わたしが生きる町」
「“知”を広げる街、多摩区」
「多摩区 CM」
「スポーツと文化の場」
「ワンダフル川崎」
「楽しいぞ！川崎マリエン」
「地域発デジタルコンテンツ」総務大臣奨励賞
「わたしが生きる町」

2018 年度
川崎市多摩区長優秀賞
「大切な人と共有したい自然」
専修大学広報課最優秀賞
「世界が広がる、専修大学」
専修大学広報課優秀賞
「仲間と共に」
専修大学広報課特別奨励賞
「ここで良かったと思える場所」
専修大学入学センター優秀賞
「専修大学 140 年」
専修大学教員特別奨励賞
「自然あふれる多摩区」
「今はふるさと」
「散歩ついでにタイムスリップ」

2019 年度
川崎市多摩区長最優秀賞
「多摩区で○（タマ）探し」
川崎市多摩区長優秀賞
「たまップ」

専修大学広報課最優秀賞
「せんだい！（ネ学全面 edit.）」

専修大学広報課優秀賞
「センとシュウ」

専修大学入学センター最優秀賞
「未来の自分を見つけよう」

専修大学入学センター優秀賞
「さまざまな価値を作る・専修大学」

専修大学教員特別奨励賞
「寄り道ができる街」
「自然が近い町、多摩区」
「多摩区には可能性がたまっている」